

# 学校林「絆の森」を舞台にした 地域密着型環境教育プログラム作り 〈都市と農村を結ぶ 産学官連携プロジェクト 10年間の軌跡〉

駒澤大学高等学校 理科 長谷川宏一

## 1. はじめに 親林教育プロジェクトと私

今からちょうど12年前の2005年から2006年にかけて、駒澤大学高等学校（以下、駒大高）の職員会議では、長野県信濃町に学校林を持つという、「絆の森」開設が議論されていた。私がこのプロジェクトにかかわり始めたのは、2006年5月のGWからである。当時私は、駒大高において1年間の非常勤講師としての勤務を終え、大学院修士課程の2年生であった。この「絆の森プロジェクト」に対するアドバイスを求められ、学生身分でお金も無かった私は、自宅から下道で車を走らせ長野県信濃町を訪れた。途中、深夜の草津温泉の公衆浴場で一風呂浴びたことは、今でも覚えている。

学校林の元々の姿は、いわゆる放棄人工林である。信濃町柏原町区の財産林であり、杉やアカマツの植樹が行われ、「材木財産」を育成するための場所であった。しかしながら戦後、外国からの木材輸入が進み、材木価値の低下・地方の過疎／高齢化が重なり、当該の場所は、手入れが滞った。このため、外来種のニセアカシヤを主とした植生が繁茂し、人が立ち入るのをはばかれるよううっそうとした森となっていた。



写真1 2006年 学校林A地区皆伐の様子

私は、学生時代より「環境教育」を人生でやりたいことの一つとしていた。そこで、自分の勤めた学校で「環境教育プロジェクト」が立ち上がったと知り、何か力になれるのであればと思い、現場を訪れた。2006年5月3日～5日、当時の科学研究部の部員と共に、植生調査を行った。この結果は、2009年3月発行の駒澤大学高等学校研究紀要、第25号に記載されている<sup>1)</sup>。学校林の起点を示す貴重なデータである。ぜひ参考にされたい。

翌2007年度、私は世田谷学園中学・高等学校で非常勤講師をする傍ら、親林教育アドバイザー（科学研究部のコーチという位置づけ）として週1回で駒大高を訪れた。2006年のうちに、学校林の6分の1程度であるA地区は皆伐されていた（写真1）。皆伐とは、森林の一新をするために、全ての樹木を一度伐採・伐根し、更地に戻すことである。

また、同様に、全体の3分の2程度であるC地区は大規模に列状間伐が入っていた。列状間伐とは、密になりすぎた森林に光を入れるため、列状に樹木を伐採して間引き、残して育てたい木に光を当てて太らせる施業である。

この状態で、私は「親林プロジェクトの今後の指針」について学校からアドバイスを求められることになる。2007年5月に当時の親林教育プロジェクト

トのメンバーと共に現地を訪れた際、昨年から一変した森林と、不信感を持った現地の人たちを前に、冷や汗をかきながら学校の考えを説明したことを覚えている。現地の人からは、「あなたは50年間このプロジェクトに関わる覚悟があるのか」という厳しい言葉が浴びせられた。皆伐した森林は再生までに数十年間の手入れを要する。現地の方々の感情はごもつともである。当時、駒大高にはつきりとした立場の無かった私は返答に困ってしまった。

2008年度、私は非常勤講師として駒大高に戻り、引き続きこのプロジェクトに関わることになる。2009年度には特任教諭、2010年度からは専任教諭として駒大高に着任した。2017年度現在もなお、親林教育委員会の一員として、このプロジェクトの充実に従事する立場にある。このように、親林教育プロジェクトの歩みは私のここまでの教員生活と共にあり、大事な一部である。後に詳述するが、交渉の経緯は決して平坦ではなかった。また、学内の体制も変わる中、学内での理解を進めることも、容易なことではなかった。しかしながら、このプロジェクトは12年にわたり風化することなく、「地域密着型の環境教育プログラム」として林間学校を通して全校生徒に体験してもらえるものになった。現在も「心の教育」の一つとして学校紹介DVDに取り上げられている。このことは私にとって感慨深く、大きな喜びである。また、出上がったプログラムは、都市と地方を結びつける一つのモデルとして、社会に発信できるものであると自負している。現親林教育委員会のメンバーである高木佑也教諭・海老澤慎一教諭の2名をはじめとし、多くの理解と協力を頂いた先生方、および信濃町の皆様に感謝を申し上げ、本稿のはじまりとしたい。

## 2. 親林教育「絆の森」開設まで

1章で述べたように、私がこのプロジェクトに関わり始めたのは、2006年からである。そのため、それ以前の記録については、諸先輩方からの伝聞であることをご了承願いたい。

「絆の森」の構想が始まったのは、2005年の4月からである。当時の浦敏之校長が、「林間学校の中に環境教育の視点を入れたい」と発信したことから始まった。2005年の林間学校では、東京学芸大学の小泉武栄名誉教授、アフアンの森財団のC・Wニコル氏の講演が行われた。また、同年の林間学校の中で、森林体験コースが設置され、妙高リブランの森で植樹活動が行われた。

その後、当時の黒姫ライジングサンホテルの支配人であった佐藤洋一氏より、長野県が行っている「森林の里親促進事業」の紹介があった。これが、現在の「絆の森」の始まりである。「森林の里親促進事業」とは、長野県の各所にある手入れが行き届かなくなった「放棄人工林」に、企業や団体を誘致することにより、その手入れを行うという事業である。企業は里親になることにより、森林の整備に資金や人材の投入を行う。現代の企業には、利益追求だけでなく、企業の社会的責任を果たすため、このような社会貢献活動を行うことが求められている。このような活動を一般的にCSR活動と呼ぶ。「森林の里親促進事業」は、県が仲介人となり、各自治体の森林を企業のCSR活動の場として提供する事業であると言える。2017年3月までに、長谷工・ヤクルト・楽天など全国126の企業がこの事業に参画している。

駒大高は、学校団体として初めてこの「森林の里親促進事業」に参画



写真2 2006年11月5日 森の里親事業 契約調印式

した。その相手となったのが、林間学校を行う長野県信濃町に存在する、柏原町区である。調印式は2006年11月5日に行われた(写真2)。この契約は、長野県(仲介人)にとっても、駒大高(里親)にとっても、柏原町区(森林の所有者)にとっても挑戦であった。何しろ前例の無い社会的事業である。一般企業とは異なり、教育機関にとっては、学校林が「教育実践の場」となることも考えなくてはならない。そのためには、「森づくり」に関しても多分な理解を柏原町区に求める必要があった。なお、2017年3月段階では、駒大高のほかにも、都立北園高校(H23)／都立葛飾野高校(H24)／学校法人成城学校(H25)が学校団体としてこの事業に参画している。

一章でも述べたが、都会の学校がこれに参画することに、現地の方々は警戒感を持っていたことは否めない。筆者は2007年5月に現地ミレーティングに始めて参加した時、それを強く感じた。森づくりとは、数十年をかけて、次世代のために行う作業である。多くの場合、一時的な満足感を得るために「植林」をしたがる人や企業はいるが、数十年をかけて責任を持って森を再生しようとするケースは少ない。しかし現地のの人にとってみれば、中途半端に手をつけて去られることはむしろ迷惑なのではないかと私は考える。樹は植えただけでは育たず、継続的な関わりを必要とする。だからこそ、一時的である

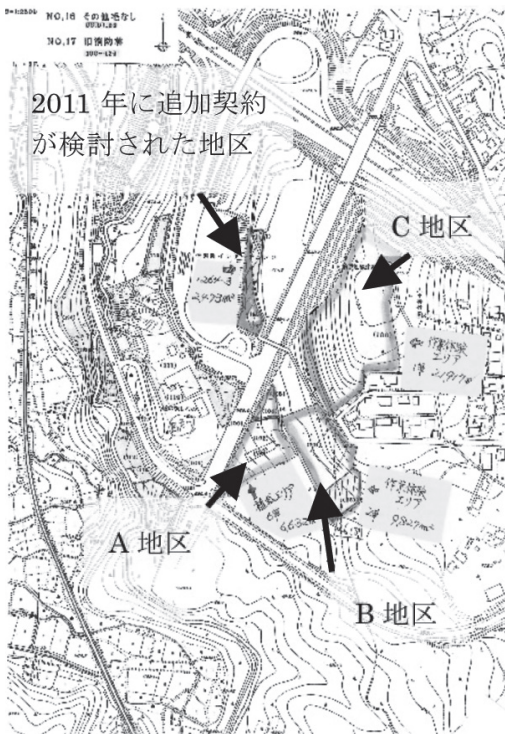


図1 契約地域の地図と上空からの画像 (google earth)



ならば森づくりの方針は現地に任せ、資金の援助を主とすることが一般的であった。しかし、当時の学校には、学校林を生徒たちの体験の場として活用したいという意図があった。そのためには、その教育の趣旨に準じた森づくりをしていく必要があった。学校側が環境教育の場として現地を整備したいと申し出た2007年の会議では、繰り返し「覚悟」

という言葉が使われた。

図1に、契約地域となった場所の地図と上空からの画像を記載する。以降、2006年に皆伐されたA地区、基本的に契約当初の状態を保つてスタートしたB地区、2006年に大規模間伐された斜面林であるC地区に分けて、森づくりの方針が作られていくことになる。

### 3. 「絆の森」1年目～5年目～森づくりの方針作り～

2007年より、本格的な森づくりが開始された。遠隔地であることもあり、生徒が関わる機会は、主に7月に高校1年生を対象に開かれる3泊4日の校外行事「林間学校」であった。2006年からは、林間学校の2日目もしくは3日目に実施される自然体験の選択コースの一つとして、この学校林における森づくり体験が設定された。しかし、当然年1回の数十人による作業で森林が育成できるわけは無い。森づくりに現地の方々の協力が不可欠であった。このため、年に1～2回の会議を信濃町で行い、柏原町区・長野県・学校で、森づくりの方針について話し合った。会議では、まずは皆伐したA地区をどう整備していくのかについてが大きな課題となった。柏原町区の最初の要望は、最も財産価値の高い「杉」を列状に植えることであった。これに対し、学校は「信濃町本来の自然」を取り戻すことを目的に、地元の山林にある樹種を植樹したいと申し出た。議論はこの隔たりを埋めていくことから始まった。私は2007年5月に学校林の基本的なコンセプトを作成し、学校方針としてまとめた後、柏原町区に提言している。その骨子を以下に引用する。

「森林と人間の関わりには、「原生林（人がまったく手を入れたことのない森）」「放棄人工林（人が手を入れた後、自然の成長に任せた森林）」

「林業林（材木を作り出すための手入れを施し続けた森）」「生態保護林（生態の多様性を保つことを目的とした森・競争に強い種には手を入れるなど管理する必要がある）」「レクリエイトのための林（下草を刈り、樹を適度に間引き、人が楽しいと感じる森）」「育樹林（幼樹を育てるためのスペース）」といった多様な関わり方が存在する。本校は、学校山林という一区画の中にこの五つのテーマ（原生林を除く）にそったゾーンを作り、生徒が森と人の多様な関わりを感じることで、「駒澤大学高等学校にしかない環境教育の森」づくりを行うことを提言する。」

このように駒大高は、基本的に「多様な人間と森林の関わり方」を森づくりの軸として考えていた。このため、学校林におけるA地区・B地区・C地区の初期状態の違いを上手く利用し、それぞれ別々の施業をしていくことを提言した。

例えば、B地区は基本的には現状維持を申し出た。これは「放棄人工林」の状態を生徒に学ばせるためである。一方、周囲を散策できるよう、下草を刈った道を作ることをお願いした。C地区は、木材チップを数ヶ所敷き、森の中で坐禅を組むなど、生徒が「レクリエーション」できる森にすることを提案した。A地区については、前述したように最も柏原町区との意見の隔たりが大きかった。しかし、粘り強い交渉の末、他の地区との境界部分については、人工林の育成を学ばせるために杉を列状に植え、その他の部分については、基本的に学校の森づくりの方針に任せていただけることとなった。A地区にはミズナラに始まり、コナラ、やまぼうし、しらかば、トチの樹、ブナ、ヤマグリ、オオヤマザクラなど、近隣の山林に自然植生として存在する樹種を植えていった。

B地区の周辺に散策路を作ることで、C地区に木材チップを敷くことも、

最初は現地の方々は難色を示した。それらは通常の人工林に行われる施業ではなく、人が森に入りやすくするための施業であったためである。この状況を打開するためには、駒大高の活動に対する地区の方々の理解をすすめる必要があった。そこで、地区の方々と生徒たちが直接交流する機会を作った。2008年度からは、B地区の大木間伐や除伐を林間学校時に生徒に体験させ、それを地区の方々に手伝っていたく形で交流を進めた。また、学内で取り組む様々な活動を、逐次柏原町区の方々にも知らせることで、学校の「本気度」を示した。その結果、2009年には木材チップ作りにも地区の方々のご協力を得られた。また、同年10月22日には、柏原町区の区長ら20名が、駒大高に來校している。このように地道な努力を積み重ね、信頼関係を築き上げた。

当時の管理職は、幾度も現地に足を運び、この事業を永続していく意志を柏原町区に示した。しかしそれでも、そう簡単に学校を信頼し、全てを任せるわけにはいかなかったのだと思う。会議のたびに、関わり方の継続性を確認されたことは鮮明に覚えている。

#### 4. 生徒や保護者がより関わる事ができる仕組みづくり

一方、説得が必要であったのは、学外だけではなかった。半ば当時の校長のトップダウンに近い形で始まったこの事業に対し、こころよく思わない教員も少なからずいた。生徒や保護者の認知も十分とは言いがたかった。あくまで林間学校のイベントに過ぎず、これが「学校として取り組む社会的事業である」という認識はほぼ無かった。

2008年度、まずは学内で活動を知ってもらうために、玄関ロビーに掲示板を作成した。活動を行うごとに掲示物を作ることで内部広報を

進めた。また、2007年度より、林間学校で体験中に掘り出した未生の苗を、生徒たちが各家庭に持ち帰って育てるという体験も追加した。その他、2009年度の林間学校の自然体験プログラムからは、生徒たちが植えた樹の近くに杭を打ち、そこに自分の名前を書いたネームプレートをつけることを始めた。これらは、より学校林に愛着を持ってもらうための工夫であった。参加者に写真をスライドショーにしたDVDを配り、体験者と一緒に地元のためのこ汁を野外炊飯して振舞うなど、体験を選択する生徒を増やすために、親林教育委員会に所属する先生方の様々な努力があった。

また、さらに学校林に行ってもらう機会を作るために、生徒・保護者・教員が自主的に参加できるツアーを2007年度から企画した。施壇会（駒大高のPTA）に所属する保護者や教員を中心に徐々に参加者が集まっていった。生徒の参加は2007年度・2008年度は0名であった。しかし、2009年度は5月に美術部10名が、日々の活動の中で作成した学校林の看板を設置しに、現地を訪れている。この看板の除幕式には、当時の校長である鈴木貞雄氏・浦敏之前校長・当時の施壇会会長である鈴木敏孝氏、当時の事務長である澤口洋一氏も参列した（写真3、図2）。また2010年度からは、校友会（生徒会）や宗内生が学校の代表として参加してくれるようになった。図3に、2013年度までの親林教育プロジェクトへの参加人数の推移を示す。内部広報の充実と共に、徐々に参加人数が増えていったことが分かる。



写真3 2009年5月31日 美術部製作の看板の除幕式（この看板は2017年現在も色あせることなく存在している）

森林整備の生徒  
自作の看板設置  
信濃町柏原町の区有林で  
森林整備などを行っている駒  
沢大学高校（東京）の生徒が  
森林に設置する看板を自作  
し、31日、現地で除幕式を  
行い、写真も撮影した。同校  
の生徒は、今年もスポーツタイ  
プの1928・73年式の89台  
がエントリー、2日間で計約  
3000mを走った。



約30人が祝った。  
同校は2006年、県の「森林（もり）の里親促進事業」を利用し、同区と区有林約5  
層、横3・6層で、アルミ板  
に雨にも強い特殊塗料を使っ  
て森林の名称「親の森」と  
書いた。  
作った美術部たちが訪  
れ、除幕式前はシラカバ約  
20本も植えた。3年で同部部  
長の山崎由佳さんらは「初  
めはちゃんとできなかつた  
けれど、完成してうれし  
い。大人になってもまご  
を訪れたい」と話していた。

図2 看板除幕式を報道した新聞記事（信濃毎日新聞2009年6月1日）

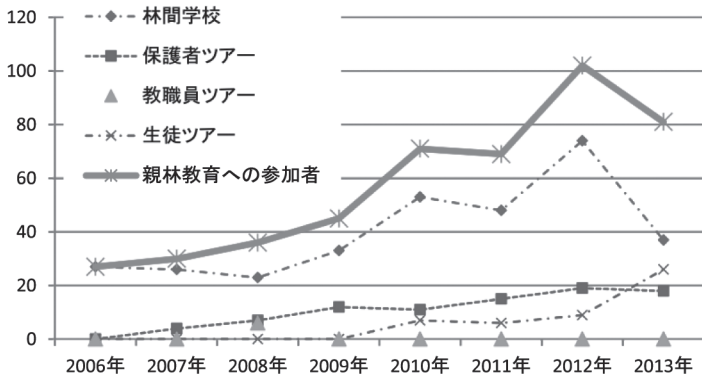


図3 親林教育への参加者の推移（2006年～2013年）

5. 学校林のモデル「アフアンの森」と「癒しの森プロジェクト」

ここで、学校林の森づくりの方針を作るにあたり、モデルにした森林である「アフアンの森」と、当時より信濃町が町をあげて取り組んでいる「癒しの森事業」を紹介したいと思う。この二つは、学校林の歴史を理解する上でぜひ知っておいて頂きたいものである。

「アフアンの森」は、日本の放棄人工林に問題意識を持ったC・Wニコル氏が、林間学校を行う黒姫において森林の再生に取り組み、作り上げた森である<sup>34)</sup>。この活動は実に1986年から始まっており、現在は一般財団法人C・Wニコルアフアンの森財団がその管理を行っている。C・Wニコル氏は、杉やヒノキの人工林が放置され、地表面に光が届かず「幽霊林」と呼ばれていた状況に問題意識を持ち、地元の人と協力しながら森の再生を試みた。その活動は社会的に高く評価され、2016年には天皇陛下も現地を訪れている。「日本本来の植生を取り戻し、生物多様性を育む森を作りあげる」というコンセプトは学校林と共通しており、植える樹種や施業方法を考える際、この森を大いに参考にした。筆者は2007年7月に初めてこの森を訪れている。言葉で表現すること

は難しいが、みずみずしい大木がいくつも存在し、その多様さ、そして美しさ、心地よさに深い感動を感じたのを覚えている。

次に、「癒しの森事業」を紹介する。林間学校における体験プログラムは、2007年度より学校林における森づくりの体験を半日とし、残り半日を森林セラピストによる森林セラピーを受けて過ごすプログラムとした。これは、完成した森の心地よさを、生徒に感じてもらうためである。このようなプログラムが可能であったのは、長野県信濃町が「癒しの森事業」を2003年から開始しており、森の力を活かした町づくりを行っていたためである。2017年現在においてもこの事業は継続しており、癒しの森散策コース作り、癒しの森弁当の作成、癒しの森の宿の登録など、徐々に規模を拡大している。この事業において何より素晴らしいのは、森林メデイカルトレーナーという人材の育成を欠かさずに行っている点である。本校の生徒達もこのメデイカルトレーナーの方々にお世話になってきた。また筆者は、学校林の活動を考え発展させてくる上で、森林メデイカルトレーナーの筆頭として活躍される高力一浩氏に、多大なお力添えを頂いてきた。高力一浩氏は、2017年現在「森の力を活かした国民の健康づくり」という大きな夢の下、被災地における森の学校づくり、韓国における森林セラピープログラム作りなど各地で活躍されている。高力氏は、林間学校における自然体験学習のインストラクターの一人であることは勿論、2017年度まで10年以上にわたって本校林間学校の開校式において講演を頂いている。また、前述した保護者ツアーでは、高力氏の営むペンションである「ロッジしらかば」に宿泊し、様々なアドバイスとノウハウを頂いてきた。後に詳述する新たな林間学校作りは、この高力氏の協力なくして成り立たなかったものである。

## 6. 「絆の森」5年目～10年目

### 〈育樹と更なる発展に向けた方針作り〉

森の里親促進事業は、その事業の性質上、5年ごとの契約更新が必要になる。駒大高校と柏原町区は2010年度よりこの契約更新に向けた話し合いを始めた。植林を進めたA地区は、地区の方々に年に2～3回の下草刈りをして頂くことで、徐々に木々が育っていった。植林を必要とするスペースも

少なくなり、森づくりは「育樹」という次のステージを迎えた。駒大高と柏原町区は協議の末2011年に森の里親事業の契約更新を行い、2012年7月17日（林間学校の前日）に学校長・校友会の生徒達の立会いの下、契約更新式を行った。

この再契約に際し、駒大高は、さらに皆伐・植林が



写真4 B地区における間伐・除伐した樹の木材チップ化の様子

必要な周辺地域の模索も行った。しかし、現地に行く機会が限られている本校にとって、学校林の範囲が拡大しすぎることは、必要な手入れが行き届かなくなるリスクや費用が拡大しすぎるリスクを背負うこととなる。そこで話し合いの結果、第一期に契約したA地区・B地区・C地区の3地区を再び契約し、体験内容を再考していくこととした。2012年度より、今までのような植林を中心とした体験から、A地区の育樹（萌芽・枝の選定）やB地区における間伐・除伐体験を主にするプログラムへと林間学校の内容を変更した。B地区においては、2013年度から長野県林務課の協力を得て、除伐した樹を木材チップにする体験も行った（写真4）。

一方、多くの生徒にこの学校林に関わってもらうため、2010年度より「クラスの樹」の植樹も始めている。これにより、林間学校の最中一度は全生徒がこの学校林に足を踏み入れる形が出来た。



写真5 用具倉庫となるコンテナ設置とその装飾の様子  
(2013年11月3日・4日)



写真6 装飾の完成した倉庫 (2016年の様子)

今まで積極的に手を入れてこなかったB地区は、この頃より主に鋸や鎌を使った森林施業の体験スペースへと変わった。また、B地区の中で、ニセアカシヤが大半を占めていた範囲を大規模に間伐（4割間伐）することで、新たな植栽を行うスペースとした。このように、B地区についても森の再生に向かって施業を始めた。この他にもA地区では、過去に自分が植えた樹木の周りを自ら下草刈りする体験も行った。

また、これらの作業を容易にするため、作業に必要な鋸や鎌などの用具を保管する倉庫を2013年度に学校林内に設置した。この倉庫は元々JR貨物のコンテナだったものである。それまでは、用具については林間学校で宿泊する黒姫ライジングサンホテルの屋根裏に保管されていた。コンテナは2013年度の11月に自主参加のツアーに参加した26名の生徒たちによって装飾され、現在も「絆の森」の象徴として存在している（写真5・6）。

さらに、2012年10月の保護者対象ツアーでは19名が参加し、一如会（駒大高保護者のOB・OGによる団体）によって記念植樹がされ、その寄付金によって2009年に設置した美術部作成の看板の裏側に過



写真7 親林教育の参加者を記録するボード  
(一如会が杵を寄贈)

去の各年度の参加者を記録したボードが取り付けられた（写真7）。当時ボードは2006年から7年間で分取り付けられたが、25年分が入るようにならされている。この事業に多くの人が関わ



ってきたことと、事業の継続性を象徴するものとなった。

学内においては、林間学校における教育効果の更なる向上を図るため、親林教育に関する事前講演会が開かれるようになった。最初に開催されたのは2009年度であり、筆者が講演者として登壇した。2010年度からは、日本熊森協会の会長や副会長に講演を頂くことと、同協会が発行する「クマともりとひと」という小冊子を生徒に読ませることで、事前学習とした。この事前学習は2017年度現在も継続している。

## 7. 「絆の森」10年目〜現在

〈全校生徒が絆の森に関わる体験プログラムへ〉

このように、駒大高の親林教育は、多くの人の力添えと理解・協力の下、2006年より徐々に発展していった。その中で植樹した木々も育ち続け、A地区の木々は背丈を超えるまでに成長した。しかしそんな中、継続的な課題として残されたのが、如何にその教育を全校生徒に広げていき、より教育効果の高い場とするかという課題であった。

プロジェクトに大きな転機が訪れたのは2014年度であった。2013年度より現校長の貫井洋氏が校長となり、学内の体制も変化した。それに伴い「学校林を維持していくならば、より林間学校と密接にリンクさせるべきではないか？」という問題提起がなされた。これをきっかけに、ついに「絆の森」を舞台にした環境教育は、林間学校という一つの校外行事の軸として、大きく再編される事となる。

2015年、親林教育委員会・校外教育係による新しい林間学校プログラムの策定に向けた委員会が設置された。筆者はその委員会のメンバーとなった。2015年3月、年に一度開かれる柏原町区との会議の前に、5章で紹介させていただいた高力一浩氏、及び黒姫ライジングサン

ホテルの元支配人でありこのプロジェクトの立役者である佐藤洋一氏とお会いし、新たな林間学校に向けた素案が策定された。その概略は以下の通りである。

まず、林間学校における4日間にストーリーを作った。1日目は、クラスの樹の植樹から始めることとした。クラスの樹は、事前に1ヶ月半にわたり教室の中で育て、名前をつけクラス全員の愛着がわくようにする。これにより生徒はまず「自然と関わる」という意識を持つ。2日目は、従来と同様に選択型の自然体験を行うが、全ての体験は信濃町や黒姫で行い、体験の中で全員が学校林に関わるようにした。以前の体験では信濃川でのラフティングや斑尾高原でのジップラインなどが含まれていたが、これらを廃止した。この日に、生徒達は自然の見方をインスタクターの方々より学ぶことになる。3日目は、戸隠自然公園におけるクイズ形式のウォークラリーを行うこととした。これも伝統的に行われてきた行事であるが、2日目の学習内容をもとに取り組めるよう、内容を刷新した。この日は、生徒たちによる学んだ内容の実践の日である。4日目は、信濃町での半日民家体験を行う。信濃町の自然と共に暮らす人々と関わることで、地方や自然に対する深い学びをすることを目的とした。

この環境教育プログラムの鍵は「全員が学校林に関わること」と「地域密着型」であるということである。1日目から4日目の流れを崩さずに林間学校を実施することを目的に、1学年を1班と2班に分け、出発日を1日ずらして林間学校を実施することが計画された。この新しい林間学校は、2015年度の話し合いを経て、2016年度から実施されている。その詳細な内容や、実施結果の振り返りについては、同誌に掲載されている高木佑也教諭の報告を参考にして欲しい。

一方本稿では、この取り組みが実現した背景には、2006年から築き上げた、地元の人との強い信頼関係があることを強調したい。2017年度現在、絆の森の森づくりの方針に対して、柏原町区は駒大高への全面的な協力を表明してくださっている。また、高力一浩氏をはじめとした地元の森林メデイカルトレーナーの方々は、駒大高だけのために、学校林を舞台にした自然体験プログラムを再構築してくださった。筆者は、「森の力を学び実感する森林セラピーを、学校林を舞台にして行う」という2007年に打ち出した夢を、2016年に実現することが出来た。それは、学校林にそのコースを考え、整備してくださったこれらの方々のお力によるものである。そして、信頼関係は一夜にして築かれたものではない。本稿に記載したように、多くの先生方の努力があり、参加してくれた生徒たち、保護者の方々の協力があって築かれてきたものである。その価値は何ものにも変えがたい財産であると思ふ。

「絆の森」事業は2016年11月に3度目の契約更新を行い、次の5年間に向かって歩み始めている。

## 8. おわりに

最後に、2007年から2017年までのA地区の変容を、写真8に掲載する。少しずつ木々は成長し、森林へと成長している様子が分かる。筆者はこの事業に携わりながら、自然を再生するという継続的な事業の難しさも、その実現の喜びも感じてきた。多くの場合このような試みは挫折で終わってしまうことも多いように思う。社会では「持続可能な開発」や「次世代へ美しい自然を残す活動」が叫ばれている。しかし、人も移り変わる一つの組織が、それを継続的に実施し、実現することは非

常に難しい。筆者は学校林が出来た当初より、「20年後、30年後、皆が関わった森林がどうなったかを見て来て欲しい」と生徒に伝えてきた。そして、その約束を守りたいという一心で、この事業を継続すべく努力してきた。しかし、事業の継続が危ぶまれるような場面は何度もあった。2017年度現在、この「絆の森」事業は、「地域密着型環境教育プログラム」として一つの形となり、次世代に引き継がれている。これは本当に幸運に幸運が重なって実現していることだと思ふ。そして、その幸運の最も大きなものは出会ってきた人達であると感じる。

契約当初、柏原町区長であった中村順佑氏、町区の林務を担当していた竹内日吉氏は、今は故人となっている。お二人には、絆の森の創世期に町区の方々へ理解を進めていただき、温かくも厳しく、熱く思いを持って議論をしていただいた。心より感謝申し上げます、こ



写真8 「絆の森」A地区（植樹地区）の変容

ここに弔意を示したい。また、その後区長となられた後藤美信氏、現区長の中村新一氏をはじめとし、柏原町区の全ての方々に感謝申し上げます。

次に、長野県長野地方事務所林務課で森の里親事業を担当して下さり、仲人として現地と学校を繋いでくださった、泉川尚久氏・北澤啓至氏・草間淳也氏・小池一成氏にも格別の謝意を示したい。林務課の方々には、会議や契約の調整だけでなく、林間学校にも参加していただき生徒への体験指導も頂いてきた。また、信濃町農林水産課の皆様にも、町への広報などにご協力を頂いてきた。

さらに、文中にも繰り返し記させていたのだが、この自然体験プログラムの骨子を共に作ってくださり、長きにわたり林間学校において生徒たちをご指導いただいている、森林メデイカルトレーナーの高力一浩氏なくして現在の林間学校は存在しない。また、河西恒氏、金原吉孝氏、間瀬理江氏、細田さとみ氏をはじめ、現地インスタクターの皆様の協力と現在のプログラムが成り立っている。あらためて御礼を申し上げます。

そして、この事業を本校に提案し、現在信濃町における民家体験の受け入れ窓口を担当して下さっている佐藤洋一氏も、このプロジェクトになくてはならない方である。深く御礼を申し上げます。

最後に、学内においても、このプロジェクトを理解し、協力して下さったすべての先生方に謝意を示したい。特に、このプロジェクトが立ち上がった当初より委員会に所属し、若い私を支えて下さった、二瓶要助教諭・久保田實助教諭・山海俊範助教諭・谷口英嗣助教諭には深い感謝の念を頂いている。また、プロジェクトの発案者である浦敏之元校長、鈴木貞雄元校長、そして現管理職であり、このプロジェクトが大成するきっかけを作ってくださった貫井洋校長・井上誠二教頭にも厚く謝意を示

したい。

「環境教育をしたい」という志はあっても、それを実践する場を与えられることは大変に難しいであろう。駒澤大学高等学校に縁をいただき、学校林を舞台にして自分の志を実践する事が出来た私は、とても幸せだと思う。関わってくださったすべての皆様に感謝を申し上げ、本稿の締めくくりとさせていただきます。

駒澤大学高等学校研究紀要 第34号 (二〇一八年三月刊行)

責任著者連絡先: [khasegawa@komazawa.net](mailto:khasegawa@komazawa.net)

#### (参考文献)

- 1) 長谷川宏一・二瓶要功(二〇〇九) 親林教育「絆の森」開設―駒澤大学高等学校、環境教育への挑戦―、駒澤大学高等学校研究紀要第25号、p1～p13
- 2) 森の里親促進事業 長野県公式ホームページ  
(<http://www.pref.nagano.lg.jp/ringyo/sangyo/ringyo/seibi/satooya/>)
- 3) 一般社団法人 C・W・ニコル アファンの森財団ホームページ  
(<http://www.afanor.jp/>)
- 4) C・W・ニコル(二〇一三)アファンの森の物語 Art Days 書籍
- 5) 信州信濃町 癒しの森ホームページ  
(<http://iyashinomori.main.jp/>)